

# 豊臣時代の伏見城下町と大坂城下町

松尾 信裕

---

**要旨** 秀吉という同一人物によって建設された伏見と大坂の城下町は近世城下町の発達過程において重要な位置を占める。この二つの城下町は、都市の平面構造にも違いが出ている。先に建設された大坂は堅町プランの城下町で、その後もその形態を保持して拡大し続けた。伏見はその出現時には小規模な堅町であったようだが、城下町化を図った文禄段階に横町プランの城下町へと変容した。

大坂は織田信長の後継者となって、自らの本拠地として建設した城下町である。秀吉亡き後も秀吉の本拠地として繁栄し続け、大坂の陣まで多くの町人が居住する城下町となっていった。さらに徳川幕府によって西日本の中心となる商業都市へと再生させられた。

一方、伏見城下町は関白の座を甥の秀次に譲った後、秀吉の隠居所として建設されたが、嫡子秀頼の出生によって政権を秀頼に移譲させようとする秀吉の欲望によって都市の性格が大きく変化した。さらに、秀次事件ののち、京都に代わる豊臣政権の公儀の城下町となっていったが、秀吉の死亡により、豊臣家と徳川家の確執の場となり、都市として繁栄していくことはなかった。

---

## はじめに

天正11年（1583）の9月から建設され、その後、本丸を中心に文禄3年（1594）、慶長3年（1598）と拡大していった大坂城下町。天正20年（1592）に指月<sup>しげつ</sup>の地に隠居屋敷として建設が着手され、その後、文禄3年（1594）に城郭として改造され、文禄5年（10月27日に慶長に改元）の7月12日に大地震に見舞われ崩壊したために、城郭を木幡山<sup>こはたやま</sup>に移し、再建された伏見城と城下町。

大坂と伏見は変遷過程も異なるが、それぞれの地に城下町として建設された理由も大きく異なっている。以下では豊臣秀吉が建設した城下町の特徴を見出すために、大坂と伏見の城下町の構造を比較して、両者の共通点や違いを見て行く。なお、伏見の場合、城郭が移転したために、最初に築かれた指月伏見城と城下町の構造は明確ではない。そのため、伏見は文禄5年から築かれた木幡山伏見城と城下町について検討する。

## 1 城の建設期間と構造

先に築かれた大坂城の構造から概観する。天正11年4月21日に柴田勝家を賤ヶ岳で破った羽柴（豊臣）秀吉は、一月後の5月末から6月初め頃に大坂に入ってきている（『石井文書』・『多聞院日記』）。そして、8月7日には大坂普請のために近江から諸職人を集めており（『河路佐満太氏所蔵文書』）、8

月19日には石曳きの道の整備が命じられ、28日には築城掟書が発せられて、9月1日から本格的な築城工事に着手した(『兼見卿記』)。大坂に入って3カ月の間に大坂城の縄張の青写真を完成させ、工事の段取りも決めている。

それと同時に城下町の建設も進めており、本格的な築城工事に着手した日の前日の8月30日には長岡越中(細川忠興)をはじめとする武家屋敷も、建物は仮屋状態であるが敷地の普請が完了している。また、大坂から四天王寺方面へと町屋も建ち並んでいる(『兼見卿記』)。この町屋は平野郷から移転させられた町人たちが造っていたようで、『兼見卿記』天正11年9月1日条には「悉天王寺へ引寄也」と記されており、ルイス・フロイスの報告にも「大坂の商業と繁栄のため、移住することを求めた」とある(『16・17世紀イエズス会日本報告集』)。

天正11年から始まった大坂城築城工事は、天正13年には天守が竣工しており、2年で本丸部分が完成している。その翌年の天正14年正月からは二の丸工事に着手しており、これも2年後の天正16年3月に「晦日、(略)世上花盛也、大坂普請モヨウヨウ周備云々」(『多聞院日記』)とあることから、工事が終了していることがわかる。この工事には西国大名も動員させられていたようで、『貝塚御座所日記』には「大坂ニハ中国之大名ノボリテ普請アリ、人足七八万、又ハ十万人」と記されている。ここまで足掛け4年で現在の大阪城外堀までの範囲にある城郭が出現した。これ以降、惣構工事が始まる文禄3年(1594)まで大坂城に関する工事がなく、当時の大坂城は二の丸までと認識されていたのであろう。

一方、木幡山伏見城は指月伏見城が文禄5年(1596)7月12日深夜の地震で倒壊したため、その直後の7月15日から木幡山で新築工事に着手した。翌慶長2年の5月には天守と殿舎が完成している。1年にも満たない期間で中心部が完成しており、突貫工事で行われたことがわかる。大坂城では2年で本丸部分が完成しており、伏見城での工事がいかに急がれたのかが判明する。動員させられた大名が多くなったのではないだろうか。桃山陵墓地内に残る城郭の縄張を見ると、本丸を中心として西に「西丸」「三ノ丸」「石田治部少輔郭」と続き、北には「松の丸」「山岡道阿弥」「前田玄以」「浅野長政」「長東大蔵郭」が連なる。東は「名護屋丸」、南東に「山里丸」、南に「増田右衛門尉郭」と多くの曲輪が配置されている<sup>(註1)</sup>。本丸以外の曲輪工事は本丸完成後にも進められたであろうが、秀吉が亡くなる慶長3年まで工事が進められていたとしても足掛け3年と短い。縄張普請と殿舎建築の両方を短期間で完成したのは驚きである。北堀内での調査[丸川義広2010]や平成21年(2009)から行われた日本考古学協会など16学協会による立ち入り調査[大阪歴史学会2010・2014]では「増田右衛門尉郭」の南斜面の一角や、「松の丸」北側の空堀の南斜面の一部で石垣が見つかっており、曲輪を囲う斜面や堀には石垣が築かれていたことが判明する。

## 2 城下町の構造の比較

**大坂城下町** 大坂の城下町については先にも述べたように天正11年(1583)の8月から町人地や武家地の建設が始まっている。町人地については築城開始期には大坂城から四天王寺まで伸びる2条の道路に面した町屋が軒を並べていることが、吉田兼見の『兼見卿記』に「在家天王寺へ作り続く也」

と記載されていることからわかる。この町は上町筋と谷町筋に挟まれた、南北方向の上汐町と南北平野町にあたる。この町人地が奥行き20間の屋敷地が連なっていることから、同じ奥行きの町人地が存在している大坂城から渡辺津の故地である高麗橋通り方面への、現在の島町通りに面した町人地も同じ時期に建設されたのではないかと想定した [松尾信裕2004]。

築城初期にはこの2箇所<sup>の</sup>町人地が大坂城下町の町人地である。この2箇所はいずれも大坂城へ向かって伸びる道路に面した町人地で、城に向かう道路に面した町であることから堅町と分類できる。

島町通りの南には釣鐘町・船越町・内平野町・内淡路町・大手通りと、島町通りに並行する東西道路が5条展開するが、これらの町の屋敷地は奥行きが15間と島町よりも短くなっている。このため、これらの町は島町の建設よりも遅れて開発された町と考えた [松尾2003]。その時期は天正13年以降になると考えている。秀吉の関白任官や二の丸工事着手など、豊臣政権が安定したことによって各地から大坂に職商人が移住してきて、その居住空間を増設したのではないだろうか。ここも大坂城の方向に伸びる道路に面した両側町で構成された堅町となっている。

これより南の糸屋町以南は元和5年（1619）以降に伏見町人の移住によって再開発された町と推定された [内田九州男1982]。元和期に成立した町であるにもかかわらず町の形は堅町になっているが、これは先に大手通り以北の町が形成されていたために、それに並行する道路を敷設したことによる。この地域の、大手通りより11条南にある和泉町で平成14年（2002）に行った発掘調査では、豊臣段階の瓦窯が9基発見された。それらの瓦窯は厚い整地層によって覆われ、江戸時代には町人地となっていた。この和泉町も伏見町人の移住地であり、豊臣家が滅亡した大坂夏の陣までは先の瓦窯が操業していた可能性がある。伏見町人の移住地を含む大手通り以南にあたる惣構の南西部や南部一帯は、豊臣家直属の各種工房や下級家臣団の居住地が広がっていたのではないだろうか。

さらに時期が下って慶長3年（1598）には大坂城惣構内に大名屋敷を置く三の丸が建設されたために、大名屋敷となる場所に住んでいた町人や寺院を強制移転させ、町人の新たな居住空間として船場を開発した（「大坂町中屋敷替」）。この時新たに建設された船場の町人地は、天正11年に建設された高麗橋通りの南に広がる。高麗橋通りとは方向を少し違えた東西方向の道路に面した奥行き20間の敷地を並べたもので、ここも堅町となっている。大坂城下町の町人地は徳川直轄地段階までの町人地はすべて堅町を採用している。

武家屋敷は大坂城二の丸の外側に建設されていたと推定できる。大阪城公園の南西にある大阪歴史博物館とNHKが建つ敷地の発掘調査で、様々な金箔瓦に混じっておもだか沢瀉紋の金箔押方形飾瓦が出土し、その敷地が東西120m、南北240m、面積8700坪にもなる屋敷であったと推定されており [大阪市文化財協会1992]、うまじるし沢瀉紋を馬標とする豊臣秀次の屋敷と推定する意見もある [中村博司1989]。発掘調査の結果、この巨大な屋敷は三の丸が建設される以前に金箔押沢瀉紋飾瓦が廃棄され、屋敷地を囲う堀が埋まり、敷地の嵩上げが行われており、慶長3年までに造替されたと考えられている。

この敷地の西にも同等の広さの屋敷地が推定されている。また、難波宮跡史跡公園一帯でも金箔押瓦や家紋瓦が多数出土し、屋敷地を囲うと推定できる幅3～5m程の堀が数箇所<sup>で</sup>検出されていることから、大阪城公園南方の法円坂一帯には堀を巡らせた大名屋敷が展開していると推定できる。

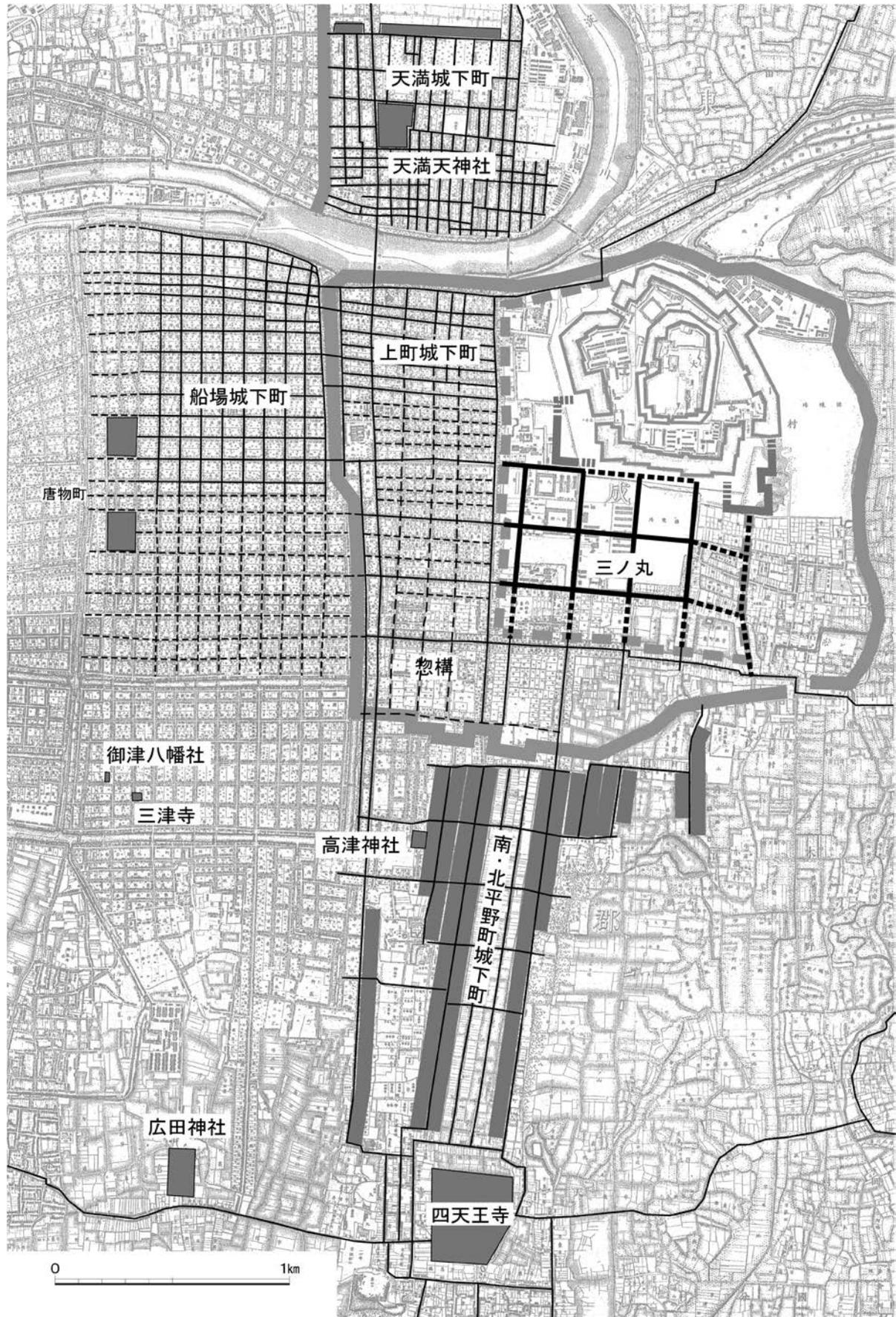


図1 豊臣後期大坂城下町推定図 (松尾作図)

大坂城下町は上町台地北端部の最高所に城郭を築き、その南と西に有力家臣や大名の屋敷を配置している。直属の下級家臣団の屋敷地は城郭より少し離れて、大名屋敷や町人地の周囲に置かれていた。大坂では寺町も築城初期に建設している。その場所は上町台地を南北に伸びる町人地を取り囲むようにしており、城下の端を視覚的に現したものであろう。大坂は階層別の居住空間が設定されていた(図1)。

**伏見城下町** 伏見城下町は東端の木幡山に城郭を築き、その西に120～130m間隔で東西南北方向の地割が残っている傾斜地が広がり、そこに大名屋敷が配置されていた[森島康雄2001・山田邦和2001]。その広がりには南北1700m、東西900mもある。この一帯での発掘調査でも門や石垣、石組溝などが見つかり、規模の大きな屋敷地が存在したと推定できる。また、屋敷地の造成にあたっては傾斜地であるために高くなる東側を削平し、低い西側に土砂を盛り、西端に石垣を築いて平坦な屋敷地を確保している。

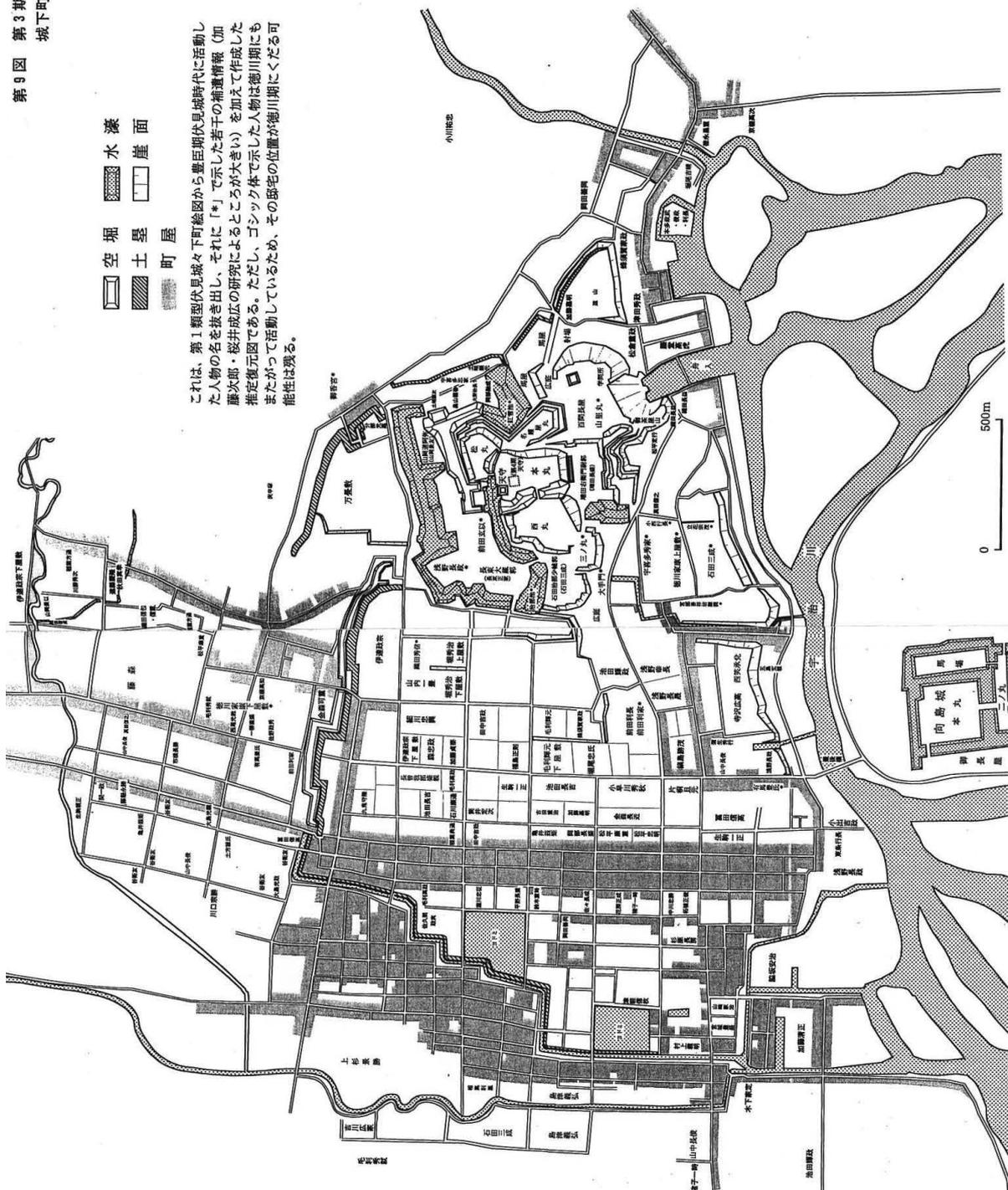
伏見城は木幡山に城郭を築く前、天正20年(1592)に宇治川に臨む指月の地に秀吉の隠居屋敷が築かれていた。そして文禄3年(1594)になって隠居屋敷を城郭へと改造した。この段階で伏見でも惣構が建設されている。『駒井日記』文禄3年正月20日条に「大坂御普請割之様子、伏見之丸之石垣 同惣構堀 大坂惣構堀 此三ヶ所へ三に分而被仰付由」とあり、大坂での惣構工事と同時に伏見城の石垣構築工事、惣構堀の掘削工事が進められている。山田邦和はこの時の惣構は木幡山伏見城期の惣構と同じ位置に存在したと推定している[山田2001]。文禄3年以降、この範囲に大名屋敷や町人地が置かれたのである。大名屋敷については、京都府立桃山高校敷地付近では上下2枚の遺構面が確認され、上層から武家屋敷の遺構が見つかり、下層からも金箔押瓦が出土したことから上下の遺構面に武家屋敷があったとする[森島2001]。この下層の武家屋敷が指月城期の武家屋敷で、城域の北方に広く広がっていたのであろう。

町人地については、この空間の西に京町通りと両替町通りが惣構内を縦断しているが、この長く伸びる町人地が惣構の土塁を越えていない形態から考えて、惣構建設以降に建設されたと考えられる。文禄3年までの城下町については、指月屋敷の西の伏見湊付近に広がる魚屋町や大坂町、油掛町以南の町が最初期の城下町で、東にある城に向かって道路が伸び、その両側に町屋が展開する豎町型であったと指摘されている[中西和子2003]。

とすれば伏見城下町は天正20年(1592)の段階では隠居屋敷とその周囲に広がる武家屋敷、そして伏見湊付近の町人地で構成される小規模な城下町であったと想定できる。それが文禄3年(1594)の城郭化工事や惣構工事によって大きく変貌したのであろう。武家屋敷も惣構内に集中して置かれ、町人地も伏見湊付近の町場に加え、城下町を南北に縦断する2条の道路の両側に間口を開く町屋が展開する長い横町型の町人地が建設された。そして文禄4年の秀次事件によって聚楽第の破却とともに聚楽第周囲の大名屋敷や秀次に仕えていた家臣団が伏見へと移動してきて、伏見の武家屋敷が増加してきたと推定できる。さらに文禄5年(1596)の大地震によって城郭が木幡山に移動したことで木幡山城と一体になるように大名屋敷の整備が行われ、森島康雄や山田邦和が復元したような城下町となったのであろう(図2)。復元された城下町をみると、伏見でも整然とした階層別の居住空間が設定され

ていた。また、城下町の一角に港湾機能も置いていた。

第9図 第3期伏見城（豊臣期木幡山城）  
城下町推定復元図



これは、第1類型伏見城々々町絵図から豊臣期伏見城時代に活動した人物の名を抜き出し、それに「\*」で示した若干の補遺情報（加藤次郎・松井成広の研究による大きい）を加えて作成した推定復元図である。ただし、ゴシック体で示した人物は徳川期にもまたがって活動しているため、その邸宅の位置が徳川期にくだる可能性は残る。

図2 木幡山伏見城下町推定図（〔山田2001〕より転載）

### 3 武家地の構造比較

城郭に近いところに置かれた武家地はこの二つの城下町で共通する地割がある。伏見では前節でみたように、木幡山城の西に広がる武家地で120～130m間隔の地割が復元されている[森島2001]。明治時代に測量された地図では木幡山城と町人地の間に250m間隔の道路が描かれており、先の地割を倍にした距離で道路が残ったようだ。この250mの地割が武家地の大きな区画を造る道路を示すものと考えられる。この道路は西に延長すると、惣構の堀を渡る橋が架かり[中西2003]、武家地の地割と町人地とが一体となっている。武家地と町人地が同時に設計されたと推定できる。その時期は先の推定では文禄3年となる。それ以降、木幡山伏見城から西へと伸びる主要道路となっている。城郭の西の、京町通りまでの間に広がる武家地は、南北1700m、東西900mで、153haほどになる。

山田邦和は惣構工事が行われた文禄3年にこの範囲が囲われるとしており、指月の地にあった城郭の北に武家屋敷が建設されたのであろう[山田2001]。図2を見ると、北側惣構の堀と土塁が本丸の北西にある「長東大蔵郭」を囲む堀の北西隅に向かうように弧を描いている。そして「長東大蔵郭」の西側堀が南北方向に伸び、「石田治部少輔郭」の西端へと続き、南の広庭を通り、指月城跡の東にある「舟入」跡へとほぼ直線で続いているように見える。文禄3年段階ではこの南北線付近までが惣構の範囲、すなわち城下の範囲であったのではなかろうか。

こうした推測が許されるなら、文禄3年以降の指月城下町は宇治川に面した惣構南東端に城郭があり、その北に大名を居住させる広大な空間を設計した。この街区は城郭が南にあることから南北方向の道路が登城道路となろう。その後、文禄5年に木幡山に城郭が移ることによって武家地から城郭への登城道路が東に向かうことになり、主要道路が東西方向の道路へと変化したと考える。城郭が南から東へと移転したことで、武家地の登城道路が90度方向を転換した。これが原因で武家地内では屋敷の改造も生じた可能性がある。

大坂の武家地については、文献史料などの検証から、大坂城南部の玉造地区に有力大名の屋敷地が存在していたと推定されているほか、城下町の周辺部にも武家地が展開していたとする[渡辺武1983]。その後、それらの推定を踏まえ、現在に残る地割や発掘調査で得られた遺構の広がりや堀状遺構の分布などを検討し、大坂城の西側の谷町筋までの範囲と、南の法円坂一帯から南の内安堂寺通りまでではないかと推定した。いわゆる三の丸で、この範囲内には幅が3m～5mの大溝がいくつも発見されており、それらが屋敷の区画施設ではないかと推定した[松尾2000]。ここには森島康雄が伏見で指摘した120m～130mの方格地割の倍にあたる250m方角の地割が展開していることも指摘した[松尾2005]。この地割は明治時代の地形図でも見ることができ、伏見でも同様の地割が地形図に示されている。このことから大坂でもこの方角地割が残る一帯が大名屋敷であり、「大坂町中屋敷替」が行われた慶長3年(1598)に建設されたと考えた。

大坂城に隣接する地域には大名や有力家臣の屋敷が広がっており、その範囲は大坂城南部の三の丸では南北750m、東西1000m、広さ約75haと、大坂城から谷町筋までの範囲の南北700m、東西200～400m、広さが約21ha、都合約100haほどである。これ以外に家臣団屋敷が惣構内の南西部にあったと考えており、武家地の広さは伏見とほぼ同様であったと言える。

大坂城南部以外でも武家屋敷地が見つまっている場所がある。それは築城初期から町人地であった大坂城から渡辺津へと伸びる町人地として開発された島町地区にある。惣構内の西端を南北に縦断する松屋町筋の西、大川南岸に沿って伸びる土佐堀通りの南にある敷地で、武家屋敷地の台所空間が見つかり、その東の内骨屋町筋の西、土佐堀通りの南の敷地でも大名屋敷が見つかった [大阪市文化財協会2003]。先の調査地では台所がある建物と米蔵や馬小屋など数棟の建物が見つかり、後者では門とそれに続く築地塀で囲まれる敷地が見つかり、建物配置から武家屋敷と推定できる。前者は豊臣前期段階 (1583~1598) から武家屋敷であった可能性があるが、後者は豊臣前期段階には魚名を記した木簡が大量に出土していることで魚を扱う町人地であったようで、豊臣後期段階 (1583~1615) になって武家地になったことがわかる。また、近年、船場の城下町の推定範囲の西側にあたる、道修町4丁目から大坂冬の陣で焼失した礎石建物がみつまっている [大庭重信2008]。大坂では築城初期には大坂城の周辺部にだけ武家屋敷や大名屋敷が建設されていた。それが豊臣政権の拡大に伴って臣従する大名が増え、豊臣家に仕える武家も増加してきたであろう。天正13年 (1585) の関白任官、天正14年から大坂城二の丸工事、天正18年の天下統一などを背景に大坂へと集住する大名や武家が多くなったと考える。そのために武家屋敷や大名屋敷の空間が拡大していっただろうが、一部例外はあるものの、武家地は大坂城の周辺や文禄3年に建設された惣構の南西部に集中していたのではないだろうか。

#### 4 町人地の構造比較

町人地は大坂と伏見では大きく異なっている。大坂は天正11年 (1583) に建設されてから最終工事である慶長3年の三の丸建設・大坂町中屋敷替で出現した街区はすべて堅町である。街区の奥行きは天正11年から建設された町人地は奥行き20間であるが、その後、島町の南に建設された上町地区は奥行きが15間しかない。しかし、慶長3年に建設された船場地区は奥行き20間で、その後も船場の南に拡張していった町人地も20間を基本とする。町人地が拡張して、南部では堅町には見えなくなるが、基本は最初に建設された島町~高麗橋通りの道路に並行に敷設された堅町である。大坂は幾度も拡張を行いながら町人地が拡大してきた。その段階ごとに街区の奥行きに違いが認められ、道路方向に微妙な食い違いが見て取れる。そうした地点を見つけることで、同時に建設された町の範囲が認識できる。

秀吉は慶長3年から船場の開発に着手した。その場所は文禄3年に建設した惣構の外になる場所で、郭外に新規の町人地を建設した。この段階では惣構内に新たな町人地を建設する余地はなくなっていたのだろう。新たに開発した町人地の範囲は、南が南本町通りまでと推定できるが、その後も南へ拡張して安堂寺通りまで拡大していた可能性がある。さらに、御堂筋を西に越えた道修町4丁目でも武家屋敷と推定できる礎石建物がみつかったように [大庭2008]、西へも拡大していったと考えられる。

一方、伏見では惣構内では指月城初期段階には指月城から西の湊方面へと東西道路が伸びて、城に向かって堅町であったようだが、文禄3年の惣構工事や榎島堤や小倉堤の建設などで、南山城から京都への交通路が伏見城下の南端に集中し、伏見城下を縦断して京都へと通じる南北方向の町人地が建

設された。この町は出現期から城郭に対して横町であったようだ [足利健亮1984]。町人地は京町通り・両替町通り・新町通りと3条の道路で構成される带状街区とその西の惣構堀までの空間だが、惣構の外にも聚楽町が出現しており、伏見でも郭外で町人地の開発が進んでいる。

秀吉の隠居所として出現した伏見であるが、秀頼の誕生によって性格が変容し、秀次事件で京都における太閤秀吉の居所となった。それ以降、政治都市として豊臣政権の公儀の城下町となっており [横田冬彦2001]、大名や家臣団が屋敷を構えていた。慶長3年に秀吉が亡くなると豊臣家の核となる秀頼も大坂へと移り、大坂が再び豊臣家の本拠地となった。伏見は石田三成と徳川家康の確執の場となり、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦い後は、上方における家康の政庁と化し、大名たちは豊臣家を滅ぼそうとする家康の強い意志の前にその後の戦に備え、城下に不穏な空気が広がりはじめた。

大坂は秀頼が移ってきて以降、秀頼に伴って東国の大名たちが伏見から大坂に移住してきた。それまで大坂にいた豊臣家の家臣団のほか、多くの大名の家臣団も居住する都市となった。こうした時期に大坂に来た大名の屋敷が新たに大坂に建設され、大坂は再び活況を呈し政治の表舞台に出てきた。この頃に建設されたのが、それまでの城下町の範囲の外に見つかる屋敷ではなかろうか。

大坂の町人地は慶長3年段階の街区よりも拡大し、当初の範囲外でも大坂冬の陣直前まで生活していた痕跡も見つかる。大坂城天守閣所蔵の『大坂夏の陣図屏風』をみても、大坂城周辺で繰り広げられている戦いの最中、多くの町人が大坂城の西側を北側に向かって逃走しているのが描かれている。家財道具を車に積んでいる者、風呂敷包を抱えた者、身一つで逃げている者など、夏の陣が始まるまで大坂には多くの町人が居住していたのである。

そして慶長20年の大坂夏の陣によって大坂は灰燼に帰したが、戦後すぐに市街地の再開発が徳川幕府によって進められ、町人の帰住が図られていった。これは夏の陣以前から大坂が京都に次ぐ巨大都市として繁栄していたために、徳川幕府も大坂を商業都市として復興させることを企図したのでだろう。

こうしたことで伏見とは違って徳川時代になっても巨大都市として繁栄してきたのである。

## まとめ

秀吉によって建設された城下町である伏見と大坂は、その出現時の目的から違っていった。大坂は自らの本拠地として建設され、その後も豊臣家の城下町として変容し、繁栄してきた。西日本や海外と直接繋がる港湾機能を有し、周辺にはいくつもの都市的な場が点在していた。それらを繋ぐネットワークと大坂に移住してきた多くの町人の商業活動が都市を支え、富が集中して来た。

一方、伏見は秀吉が政治権力者として頂点に立った時に隠居所として建設された城下町で、京都や大坂とは違って政治とは離れた遊興の場として建設された。しかし、秀吉個人の欲望によって政治都市へと変質した。この都市の核は秀吉自身であり、秀吉が亡くなると都市としての求心力は衰え、俳優が入れ替わり踊り出す舞台でしかなくなった。家康と彼を取り巻く大名や徳川家臣団がいなくなると町人だけの町となったが、城下町が建設されてから伏見に活動拠点を移してきた町人が多かった故にここにとどまる町人も少なかった。また、城下町建設時期の違いは、異なる形の町人地を生み出すことになった。大坂と伏見、秀吉が建設した巨大都市であるが、違った姿の都市として同時代の歴史

の奔流に身を置いていたのであった。

註

- 1、曲輪名は〔山田邦和2001〕の第3期伏見城（豊臣期木幡山城）城下町推定復元図（図2）に記載されている名称を使用した。

参考文献

- 内田九州男1982、「大坂三郷の成立」『大阪の歴史』7  
大阪歴史学会2010、『ヒストリア』第222号  
2014、『伏見城研究の成果と可能性 ―縄張り論と政権論の視座から―』2014年大阪歴史学会大会特別部  
会資料  
大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九  
大庭重信2008、「道修町四丁目で豊臣期の大型礎石建物発見！」大阪市文化財協会編『葦火』136号  
加藤次郎1953、『伏見桃山の文化史』（私家版）  
地図資料編纂会1989、『明治前期 関西地誌図集成』柏書房  
中西和子2003、「織豊期城下町にみる町割プランの変容」『歴史地理学』45-2  
中村博司1989、「大坂城と城下町の終焉」佐久間貴士編『よみがえる中世2 本願寺から天下統一へ 大坂』平凡社  
2000、「秀吉の大坂城拡張工事について一文禄三年の惣構普請をめぐる」渡辺武館長退職記念論集刊行会編  
『大坂城と城下町』思文閣出版  
日本史研究会2001、『豊臣秀吉と京都』図書出版文閣  
松尾信裕2000、「大坂城内の大溝」渡辺武館長退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』思文閣出版  
2003、「豊臣大坂城惣構内の町割」大阪市文化財協会編『大坂城跡』VII  
2005、「豊臣期大坂城下町の成立と展開」『ヒストリア』第193号  
丸川義広2010、「伏見城の考古学的調査」『ヒストリア』第222号  
森島康雄2001、「考古学からみた伏見城・城下町」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』図書出版文理閣  
山田邦和2001、「伏見城とその城下町の復元」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』図書出版文理閣  
横田冬彦2001、「豊臣政権と首都」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』図書出版文理閣  
渡辺武1983、『図説再見大阪城』財団法人大阪都市協会

## Comparison of the structures of Fushimi Castle Town and Osaka Castle Town during Toyotomi's reign

MATSUO Nobuhiro

Osaka was different from Fushimi who was the castle town which Hideyoshi TOYOTOMI built in the purpose when I was born. Osaka was built as a stronghold of Hideyoshi. I prospered afterwards as a castle town of the Toyotomi. Osaka had a harbor function to be connected to the foreign countries directly as well as the country and neighboring was dotted with the cities that prospered of some. The commercial activity of many merchants who emigrated to network and Osaka who connected the outskirts city supported a city, and Osaka prospered more.

One Fushimi is the castle town which was built as a retired person place when Hideyoshi became the best political man of power. It was built unlike Kyoto and Osaka as a place of the pleasure. However, I changed in quality by the greed of the Hideyoshi individual to the political city. This core city was Hideyoshi oneself, and the centripetal force as the city declined when Hideyoshi died and became only the stage which other *Daimyos* were replaced, and appeared.

